

## 高度な知識獲得を目的とした心理学関連授業の実践

教育心理学教室

講師・富田英司

### 目的

近年、教育養成を目的とした大学のカリキュラムの多くは、これまでの専門知識を重視するスタイルから、実践を中心として専門知識と実践技能を結びつける授業内容へと移行しつつある。その方向自体は大きな意義があり、筆者もその方向性を支持している。ただ、この傾向の中で気をつけるべきことは理論的な基礎知識を軽んじることは、学生が行った実践を省察するための基盤となる知識体系を失うことに直結する。そのような知識体系は、教員はみずからの実践の意味を反省の対象とし、仲間と分かち合い、さらに改善していくための媒介であるという意味で重要である。

以上のような背景に基づき、本年度の教育社会心理学では、近年の教育界で重視されているコミュニケーションが、主に欧米の教育史の中でどう位置づけられてきたかを明らかにした後、特に現在の教育実践を読み解く上で重要になる教育心理学的研究について理解を深めることを目的とした授業を行った。内容としては、一般的には学生にとって難解だと考えられる教育思想のいくつかや社会構成主義などの教育心理学の理論が含まれており、さらには歴史的な展開を相互に結びつけることが期待された。本報告書の目的は、このような高度な知識獲得を目的とした授業を100人以上の大規模クラスで行う上での授業改善に関する知見を見いだすことである。

### 授業の概要

対象授業 「教育社会心理学」は専門教育科目の1つであり、後学期に行われた。受講対象は、学校教育教員養成課程(23名)および芸術文化課程・生活健康課程・情報文化課程(100名)の2回生以上であった。

授業の目的 人が学び、成長する過程においてコミュニケーションがいかに本質的に関わっているかを、心理学を中心に、教育学、人類学、認知科学などの研究

知見に基づいて理解し、関連する専門知識を身につける。

到達目標 (1) この100年間ほどの教育研究トレンドの変遷とその理由を行動主義以前、行動主義、認知主義、認知主義以降の4つに分けて説明することができる。(2) 認知発達について、ピアジェとヴィゴツキーの理論の違いを説明することができる。(3) 学習においてコミュニケーションが果たす役割について自分の考えを論じることができる。(4) グループ活動において、短い時間で効果的に議論できるようになる。

授業スケジュール まず教育と発達に関する理論史をプラトンの時代から現代までふり返る。その後、特に心理学に焦点をあて、行動主義心理学、ピアジェの発達理論、ヴィゴツキーの発達理論、状況論的認知論、認知心理学について各論を紹介した。この後、中間テストを行い、それについての解説や質問メールへの回答を授業で行った。最後に、学期末テストを行った。教科書 『教育方法学』佐藤学/著 岩波書店

評価 授業への積極的参加: 30%, 提出物: 20%, テスト等: 50%

授業評価 学生による授業評価は修学支援システムを利用してアンケートを行った。アンケートは、2009/02/06~2009/02/24を回答期間とした。アンケートの質問項目は共通教育科目で実施されているものと同じものを利用した。回答率は123名中14名(11.3%)。

### 理解を促すための工夫

- (1) グループ・ディスカッションの導入: 授業は大規模でかつ固定機であったが、2度ほどグループ・ディスカッションを導入した。1つのグループについて5~9名程度で、912グループ程度を構成した。ディスカッションの前には所属と氏名をそれぞれが述べるよう

にすることと1名の司会者をこちらから指定することで比較的スムーズに議論を始めることができた。授業担当者は適宜グループを回り、ディスカッションの進め方について助言を行ったり、質問を受けたりした。ただ、机が固定されていることで学生の負担が大きく、不満の声も聞こえたので当初予定していたよりも回数を減らさざるを得なかった。そのため、当初の4つめの到達目標についてはこの授業では適用しないことに変更し、そのことを学生に伝えた。

(2) 教育史上の重要概念の図示化とその改善：授業で扱った主要な概念について、その関係性を時系列上に布置し、それぞれの関係をマインドマップとしてまとめさせた。その後、授業でのフィードバックやディスカッションでの協議を通してそれを改善し、再度提出させた。

(3) 授業専用ホームページの活用：以下のURLに専用のホームページを設置し、授業のスライドやプリント類の一部、テスト、質疑応答の内容を公開した。

[http://www.edupsyched.ehime-u.ac.jp/tomida/class04\\_communication/index.html](http://www.edupsyched.ehime-u.ac.jp/tomida/class04_communication/index.html)

(4) 小テストと中間テストの導入：授業の達成目標がどのようなものであるかを理解し、理解度を受講者が把握することを目的として、小テストを2回、中間テストを1回行った。

(5) 実習の導入：フランダースの授業分析の技法については、授業を映した短い動画を見つつ、受講者全員でコーディングを行った。

#### 授業評価の結果

- 出席状況 全部出席が6名、1-2回欠席が8名
- 時間外学習 週平均0.8時間。2時間2名、1時間2名、30分10名。
- 分からない時の解決法 「友人や先輩に尋ねる」11名、「独力で解決」1名、「教員に尋ねる」2名
- 授業のレベル 「難しすぎる」5名、「やや難しい」9名
- 授業進度 「やや速い」7名、「ちょうどよい」7名

(※以下は4件法による回答であるため、平均と標準偏差を示す。評定値のラベルは次のとおりである：「強くそう思う(4)」「まあそう思う(3)」「あまりそう思わない(2)」「全くそう思わない(1)」)。

- 満足度 平均2.57, 標準偏差.76
- 学習目標を達成できた程度 平均2.57, 標準偏差.51
- 説明のわかりやすさ 平均2.14, 標準偏差.53
- 効果的な教材使用 平均2.86, 標準偏差.36
- 質問機会の設定と対応 平均3.07, 標準偏差.47
- シラバスとの一貫性 平均2.71, 標準偏差.47
- 授業改善の努力 平均2.62, 標準偏差.65, 「特に改善の必要なし」1名
- 自由記述1：良い点
  - 中間テストや小テストによって、理解を進められたこと。
  - グループワークなどが取り入れられていたので、話したことのない人とも話す機会が設けられ、コミュニケーション能力を少しながらつけることができたことがよかったと思う。
  - ピアジェとヴィゴツキーについて理解できること。
  - 教科書に載っていない内容を資料として配布してくれたこと。
- 自由記述2：改善を要する点
  - 小テストなどの解説をもう少し丁寧にしてほしい。
  - 教科書の説明などが速すぎて、メモを取ろうと思っても取ることが難しく、分かりにくい場面が何回もあったので、学生の反応や状況を見てそれに合わせて進めていけばもっと良い授業になると思う。
  - グループワークを増やすこと。
  - ポイントを絞った詳しい説明を多く取り入れて欲しい。

#### 結果についての考察

今回は修学支援システムを使ってのアンケート回答がまだ学生に浸透していないこともあるのか、全体の1割程度しか回答していないが、その範囲に限定して分かることを述べる。

授業では多くの場合、質問の時間を設けた。そのことは「質問機会の設定と対応」項目の平均が3ポイントを超えることから分かるが、授業ではグループ・ディスカッションの時を除いて質問がほとんどでなかった。自由記述の中には、「学生の反応や状況を見てそれに合わせるとよい」という意見もあるが、学生は「分からない」という反応を出すことをためらうこともあるので表面的な反応をみて判断するのは一般的に困難であろう。とはいえ、「質問はありませんか」を連呼し続けても改善しないだろう。大人数授業で自発的に挙手するには自信や度胸が必要であるのは普通のことだからである。

そこで、この点については、Eメールを使った質問を課題として設定する機会を増やすこと、より多くのディスカッションの機会を増やすことによって改善したいと考えている。ディスカッションの時間を充実させるためにも、次回は机が固定されていない教室を選択することと、TAの導入を行う予定である。

評定項目のなかで値が最も低かったのは「説明のわかりやすさ」であった。もともとこの授業は非常に抽象的な教育的・心理学的概念を多く解説するものであるため、授業者としてもわかりやすく説明するのが難しかったということもあるが、まずは受講者の多くが典型的に「分からなくなるポイント」を私がより詳しく把握することが大事だと考えている。そのためにも前述に挙げた質問を引き出すということが本質的な改善に繋がると考えている。